

悪霊 第一部・十字架の基督

悪
霊

第
一
部
・
十
字
架
の
基
督^{キリスト}

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
小沼健吾……………労働運動家
佳代……………貧しい農家の娘
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
外山澄江……………小百合のクラスメイト
遠藤苑子……………小百合のクラスメイト
菊池初代……………小百合のクラスメイト
磯田幸吉……………小百合の叔母の夫。学校教師
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭三……………満枝の見合いの相手
川奈昭一郎……………昭三の父。川奈産業社長
伊集院太吉……………満枝の父

昭和四（一九二九）年四月～七月、北海道H市

V

伊集院満枝が川奈昭三と見合いをしてから、一月が過ぎ、二月が過ぎ、やがて七月に入り、卒業式まであと十日ばかりとなった。

「どうやら、お決めになったみたい」

二人の縁談については、そんな噂が流れていた。東京の商科大学で卒業を控えながら、川奈昭三はたびたび帰郷しているらしく、H市内の公園や料理屋で、二人の睦まじい姿を見かけた人もいるという。

そんな噂話を耳にするたびに、安西小百合は脳裏に湧いて出る礼拝堂で見た光景を、必死に追いついて出そうとした。

満枝さまは、わたくしを信用するとおっしゃっていた。わたくしさえ黙っていれば……。

あと十日で、満枝さまも佐和子さまも、学校を去る。そうなればまた、穏やかな日々を取り戻せるはず。小百合はそう思い込もうとしていた。

「ねえ、ご存知？」

授業が終わった後、廊下に出ると、遠藤苑子と菊池初代が小百合の机に寄って来た。

「なに？」

「澄江さんのことよ」

二人がちらりと走らせた先に、教室の片隅でほんやりと立っている外山澄江の姿があった。苑

子が声を潜めた。

「どうやら澄江さんのお父さん、ずいぶんと困ったお立場になっているようね」

澄江の父親は、市の警察署長である。

「そうなの？」

よく呑み込めぬまま小百合が問うと、初代もうなずいた。

「ほら、四月の終わり頃だったかしら、駅前あの盛り場で、ほら、あれを破裂させられて亡くなった男の人がいると、澄江さんが得意げに話してらしたじゃない」

「あ、そうだったわね……」

苑子は、ますます声を潜めた。

「その後、なんでも四人ばかり、同じようなことで亡くなった方がいたんですって」

「え……？」

小百合は青ざめた。伊集院満枝の白い顔が目の前に浮かび上がってきた。苑子は続けた。

「四人とも、夜中に同じような傷を負わされて、朝になって見つかったんですって」

「犯人は同じ人ってことね」

初代が調子を合わせた。苑子は続けた。

「そうそう。亡くなった四人、いえ、最初の人も合わせると五人ね、そのなかに、高等学校の学生さんがいたそうなの。なんでも知事の親戚にあたる方らしくて」

犯人が捕まらぬまま、いたずらに被害者だけが増えていく。夜の外出を控える者が多くなり、盛り場は人通りが減った。知事だけではなく、飲食業の方面からも批判が出るようになり、澄江

の父は面目を失った。

それで、澄江はこの頃、元気がないのか……。すっかり影が薄くなった澄江の背中に眼差しを走らせていた百合は、苑子のひとことに胸をつかれた。

「いい気味よね、そう思わない？」

顔をあげて、苑子と初代を見つめた。二人とも、不快げに澄江に眼差しを走らせ、うなずきあっている。

澄江は、警察署長の娘であり、他の生徒たちが知らないことを知りうる立場にあった。その立場をもとに、四人の仲間のなかでリーダー的存在になった。澄江は、それが当然であるかのように振る舞い、謙虚さを欠いた言動が多かった。父親の立場とともに澄江の立場が悪化すると、とたんに溜まっていた不満が噴き出したのだ。

お気の毒に……。小百合はそう思った。できることなら澄江を慰めてあげたかった。居丈高いたけだかなところのある澄江だったが、無口で引っ込み思案な小百合に、なにくれとなく親切にしてくれたことも確かなのだ。だが、そんなことをしたら、苑子と初代は口を聞いてくれなくなるだろう。

その一方で、なんとしても澄江に聞いてみたい、そんな欲求が募ってきた。

五人もの男の睾丸を破裂させた殺人者。

もし、その殺人者が、小百合が思い描いている人だとしたら……。

その日の放課後、小百合は、苑子や初代と連れ立って校門を出、途中で彼女たちと別れてから、外山澄江の家へと向かった。

澄江の家には、すでに幾度か呼ばれていた。東京の百貨店から取り寄せたという甘い洋菓子をふるまわれたものだった。

市内の目抜き通りに近い住宅街の一角にある、旧家を和洋折衷に改造した澄江の家の、洋風の応接間に通され、しばらく壁にかかったルーベンスの模写画をぼんやり眺めていると、黒っぽい地味な和服姿の澄江が入ってきた。眼の下にくまができていて、よく眠れないのだろうか。

「珍しいわね。小百合さんから来てくださるなんて」

つとめて明るく振る舞う澄江に、小百合は笑顔をつくろい、例の件をどう切り出すか、いまさらながらに思案していると、澄江のほうから語り始めた。

「ひよっとするとわたくし、ちかぢか引越すかもしれないわ」

「え？」

「お父様が、どこか別のところの警察に異動になるかもしれないの」

澄江は、テーブルに載せられたミルクのグラスを口に運び、飲み干してから続けた。

「どうやら、寒いところらしいわ」

H市より寒いところ。札幌ならば栄転だが、それとも……。

「わたくしは、樺太がいいと申し上げているの。だって、つい二十年ほど前までは、日本じゃなかった場所なのでしょ。どういうところか、見てみたいわ」

明治三十八年の日露戦争の勝利によって、南半分をロシアから割譲され、いまだ開拓の途上にある樺太が、どのようなところなのか、小百合には見当もつかなかったが、どうやら遠藤苑子が言ったとおり、例の事件の責任をとらされての左遷であるらしいことは、笑顔とは裏腹な澄江の

悔しげな瞳で伺えた。

「そうなの……寂しくなるわねえ」

「嘘つき」

澄江は、笑みを消して言い放った。

「え……」

狼狽する小百合に、澄江は冷たい眼差しを向けた。

「苑子さんも、初代さんも、わたくしと口をきこうともしない……。どうせあなたも、あの人たちにわたくしの様子を見てこいと命ぜられたでしょう。そして、物笑いの種を見つけてこいと言われたに違いないんだわ」

「そんなことないわ！ わたくしはただ……」

小百合は立ち上がった。澄江は唇を歪め、憎憎しげにさえぎった。

「じゃあ、なんでわざわざうちに来たのよ？ おかしいじゃないの。いつも無口で、おとなしくて、自分から何かするなんて、したこともないあなたが、柄がらにもなく、独りでうちに来るなんて！」

「わたくしはただ……」

「何よ！」

「知りたくて……」

「何を？」

「あの事件を」

澄江が、小百合のほうに向き直った。訝しげに、しかし、どこか探るような眼で小百合を覗き込んだ。

「……事件？」

「ええ」

小百合は、肩で息をしながら言った。

「あなたなら、何かご存知じゃないかと……」

「事件って……」

「澄江さんがおっしゃっていた、あの事件よ。五人の男の方が亡くなった……」

澄江は口を噤み、再びミルクのグラスに手を伸ばした。飲み干そうとして残っていないことに気づき、ため息をひとつついて、小百合のほうに向き直った。

「五人じゃないわ」

「え？」

「六人よ」

澄江は、天井を見上げながら言った。

「わたくしが話したのは、盛り場で殺された人買いのことよね。その後、流れ者の土工、知事の親戚にあたる高等学校の学生さん、失業者、そしてつい最近殺された墮胎医……」

「……………」

「みんな、精巢を破裂させられていた。夜中に死んで、翌朝見つかっているのも同じ。おそらく犯人は同じ人よ。でもね、実はもう一人いるの」

「もう一人……」

「農家に生まれた白痴よ。山のなかで死んでいた。家族はもてあましていたみたいで、警察にも届けなかったようだけど、最近になって、実は同じ犯人に殺されたのではないかと言われるようになった」

澄江は、小百合のほうを向いて座りなおした。

「実はその人、わたくし、見たことがあるの。あなたもよ」

「まさか……」

「そう」

澄江は声を囁かせた。

「遠足の時に見た、あの男……」

「あ、あの人……亡くなったの？」

「ええ」

「ま、まさか……」

「嘘じゃないわ」

澄江は眼を伏せた。

「実は、お父様の部下で、わたくしを嫁に貰いたいとおっしゃる方がいるの。その方と幾度か二人きりでお食事をした時に聞き出したことだから、間違いないと思うわ」

「じゃあ、澄江さん」

小百合は、声を震わせた。

「わたくしたちが見たことを……その警察の方にも申し上げたの？」
澄江は首を振った。

「言えるわけがないわ……」

澄江が、右の手首を左手で掴んだ。右の腕がひどく震えていた。

「あの方……最近、じつとわたくしのことを見てるのよ……まるで、ぜんぶ知っている、と言わんばかりの目つきで……」

「知っているって……」

「わたくしたちが、あのことを、ずっと覗いていたことをよ。そんな気がして仕方がないの。あの方は、気づいていたんじゃないかって……」

「あの方っていったい……」

その名を口にしてよいものかどうか、小百合は躊躇ためったが、澄江のほうから明言した。

「……伊集院満枝さまよ」

それきり、澄江は口を閉ざし、微動だにしなくなった。

小百合は、澄江にかけるべき言葉を見いだせなかった。礼拝堂で、満枝と猪俣佐和子のやりとりをのぞき見た直後、満枝は小百合に「あなたを信用します」と言った。何も言うな、と釘を刺したのだ。

果たして満枝は、澄江のことを「信用」しているだろうか。

六人もの男を去勢して殺した恐るべき殺人者の正体は、本当に伊集院満枝なのか。確かに満枝ならばやりかねない……。なんとなくそう思っている。いや、確信している。だから、怯えている。時がゆっくりと流れた。

「わたくし……」

窓の外は、すでに夕焼け雲が拡がっていた。小百合は、まんじりとも動かない澄江におそるおそる声をかけ、立ち上がった。

「もう、帰らなければ……」

澄江は物憂げに小百合を見やり、それから口を大きく広げた。叫び声を抑えつけるかのように、両手で口を覆い、しばし小百合を凝視し、それから言った。

「やっぱりあなた、言われてここに来たのね……」

「え……?」

「わたくしがどこまで知っているか、探って来いと言われたのね!」

「な、何をおっしゃるの?」

「だって、そうじゃないの!」

澄江は立ち上がった。

「伊集院満枝さまは、あなたの憧れの人じゃないの！」

安西小百合は、逃げるように澄江の家を飛び出した。

澄江は荒れ狂った。小百合を、満枝のスパイと決めつけ、裏切り者とのしり、やがて言葉は支離滅裂な咆吼となり、ついには両手を伸ばして小百合につかみかかろうとした。叫びを聞いて駆けつけた書生が抱き留めてくれなければ、怪我をしていただろう。

翌日、恐る恐る登校してみると、澄江は休んでいた。急な病気という理由だった。それから、澄江を学校で見かけることはなくなった。

そして一週間後、終業式を三日前に控え、外山澄江の休学が発表された。病気が長引きそうなため転地療養するのだと、担任の教師は説明した。

VI

「退屈だわ」

「え？」

隣の席で訝しがる川奈昭三を見やり、伊集院満枝はにっこりと微笑んだ。

「退屈な映画……出ませんこと？」

銀幕で喋るグレタ・ガルボの声が、不快な雑音とともに館内に響いていた。

H市内の洋画専門館に、麻のスーツ姿の川奈昭三と、年頃らしくさわやかな赤の目立つ和装の

伊集院満枝が、さきごろ封切りとなった『肉体と悪魔』を見ていた。日本で製作される映画は、まだまだ多くが無声映画だったが、外国映画はすでに発声トキキが主流である。音が出る映画のものめずらしさも手伝って、客席はほぼ埋まっている。だが、音響設備が整っていない日本の映画館のスピーカーから流れ出る軋きんだ音の騒々しさは、古くからの映画ファンには不評だった。

まだ、映画は半分も終わっていない。昭三は席を立つことを躊躇ためらっていたが、満枝の笑顔に促され、しぶしぶ外へ出た。

八月の夏空が広がっていた。夏休みの日曜日の昼下がりとあって、目抜き通りは混んでいる。「暑いわ」

満枝はバッグからハンカチを取り出して額の汗をぬぐい、「ラムネでも飲みませんか？」と言った。

「雪花堂」という、銀座の資生堂を模したモダンなパーラーに入ると、「やっぱりわたくし、かき氷にします」と、給仕を呼び寄せて注文し、それから昭三に、「あなたは何になさいます？」と訊ねた。

「そんなに退屈でしたか？」

冷やしたコーヒーを頼み、去っていく給仕の背をちらりと見て、昭三は言った。

「何がですか？」

「さっきの映画です。キネマ雑誌では評判がよかったですので、お誘いしたんですが」

「退屈でしたわ」

満枝は、非難がましいそぶりは見せず、やわらかな笑顔をつくって言った。

「二人の男性が、ひとりの女に翻弄され、ついには決闘する……。物語としてありきたりじゃございせんか？」

「まあ、そう言われれば……」

昭三は、気弱に眼を伏せた。満枝は知らぬげに続けた。

「ありきたりというだけじゃなく、愚かしいと存じます。惚れた女のために命を投げ出す男の方って、あなたはどう思います？」

「さあ……。女としては冥利に尽きるんじゃないですか？」

「なぜ？」

「それだけ、純粹に愛していることなんですから」

「そうでしょうか？ 釣った魚に餌をやる者はいない、と申しますわね。あの映画の男性だって、結ばれぬ恋だからこそ、激情家にもなりましようが、いざ、幸せに結ばれたらさっそく他の女性に色目を使い始める……。そんなものじゃございませんの？」

「参ったな」

昭三は苦笑した。

「どこで男性の心理を勉強なさったんです？ いまの女学校では、そんな方面も教えているのですか？」

「ええ、家庭科で習いました。そのことを、これから主婦となる者はよろしく心得るべき、と」

「ひどい学校だ。そんなことを教わったら、結婚する気にはならないんじゃないですか？」

「そんなことはありませんわ」

運ばれてきたかき水をスプーンですくいながら、満枝は澄まして言った。

「日本の女性は、結婚するより他に、寄る辺よるべなんぞないも同然ですもの」

「そんなことはない。職業婦人も増えています」

「取るに足りませんわ。職業といっても電話交換手かエレベータ・ガール、せいぜい学校の先生。二三年雑用をこなして、いいお相手を見つけて結婚する。しなければいきおくれと白い眼で見られる。結局、就職するもしないも、ちょっと寄り道するかどうかの差ですわ」

鼻白んだ昭三はコーヒーを飲み干して煙草に火を点け、しばらくふかしていたが、不意に劣勢を立て直そうと、笑顔を作った。

「はああ、わかった。あなたは、ぼくを試しておいでなんですわ？」

「試す？」

「ええ。まだお返事をいただけないのは、ぼくのあなたへの愛情が、どれだけのものなのかを探っておいでなんだ。違いますか？」

「違います」

満枝は即座に答えた。

「あなたの愛情がどれだけのものなのか、わたくしは少しも疑ってもおりませんわ」

「じゃあ、なぜお返事をいただけないんです？」

「こういう時って……」

満枝は、かき氷のスプーンえの柄を立てて、視力検査のように左の眼を覆い、右の眼でじっと昭三を見つめた。

「焦らすものじゃありません？　すぐに色よいお返事をする、簡単な女だと思われてしまいかねませんか」

昭三は言い返す言葉が見つからぬまま、西洋人のように肩をすくめてため息をついた。満枝は右手で口を覆って笑った。

その背後のテーブルに、無言でうつむきカレーライスを口に運ぶ、洋装の女性がいた。帽子を目深にかぶり、その縁からはみ出した髪が顔を半ば覆っているが、わずかに見える唇が細かく震えていた。

猪俣佐和子だった。

制服以外の洋装で外出することも、独りでパーラーに入ることも、佐和子には初めての体験であった。モダンガールと呼ばれる手合いならいざしらず、良家の娘には厳しいモラルが求められていた。

まして、生来の引っ込み思案で、家庭と学校しか知らない佐和子には、席に座って注文をとるだけでも、目のくらむ思いだった。

明日、昭三さんとランデヴーなの。

そんな封書が満枝から届いたのは、つい昨日の朝だった。

もし、ごらんになりたかつたら、午後三時半に「雪花堂」にいらっしやい。小夜奈良。

文面はそれだけだった。

佐和子は、便箋を畳んで封筒に戻し、机の引き出しをあけて中の文具をいったん取り出し、封

書を底に置いて、その上に文具を戻して積み重ねた。それからしばらく、部屋のなかをうろうろと歩き回り、床に突っ伏したり、壁に頭をこすりついたりした。

心を決めたのは、昼食の席に就く直前だった。昼食を終えると、佐和子は図書館に行くと家族に告げ、家を出た。向かった先は、家を出てカフェで働いて自活している従妹だった。派手なモダンガールだが、なぜか佐和子とはうまがあつた。洋装一式と化粧道具を借りて家に帰り、寝る前にこっそりと身につけてみた。鏡に映る自分の姿に、別人になったような錯覚にとらわれた。

パーラー「雪花堂」は、ほぼ満席だった。店内の蓄音機から、西洋のジャズが流れている。佐和子の耳には、満枝が昭三に浴びせる、毒を含んだ言葉までは聞こえてこない。だが、テーブルに肘をつき、小首を傾げ、笑みを浮かべながら相手を見つめようように喋る満枝の仕草は、媚を含んで愛らしく、そのことが佐和子の心をかきむしった。満枝の視線は、ずっと昭三に集中し、佐和子がいまいかと探すそぶりも見せなかつたのだ。

昭三は、髪の毛をポマードで固めた、都会風の紳士だった。背は満枝と同じくらいだが、この二人が、瀟洒なパーラーで向かい合って座っている様子は、雑誌の口絵に登場する都会のアベックのようだった。

妬みが、やがて憎悪に変わるのに、時間はかからなかつた。

そのまま一時間が過ぎた。満枝は、昭三を相手にお喋りを続け、佐和子は、隣の席で雑誌を読み耽るふうを装った。

「あら、こんな時間だわ」

店内の柱時計は五時十分前を指していた。満枝は立ち上がった。

「わたくし、帰らなければ」

「もう少し、いいじゃありませんか」

昭三は引き留めた。

「ぼくが投宿しているホテルに、おいしい西洋料理のお店があるんです。よろしければ、夕食をご一緒しませんか」

「ああ、懐華亭ですわね。噂は聞いております。とてもおいしいんですってね。ぜひ、ご相伴したいのだけれど、今夜は、ともだちが訪ねてくる約束がありますの。残念だわ」

さして名残を惜しむふうでもなく、満枝は足早に入り口へと向かった。昭三は溜息をついて立ち上がり、女給から帽子とステッキを受け取り、支払いを済ませた。

佐和子は慌てて立ち上がり、通りへと出ていく二人の後を追った。

満枝は、手をあげて円タクをとめ、昭三に一礼すると、さっさとドアを閉めた。

車が走り去った後、通りには川奈昭三が、すこし離れて猪俣佐和子が、取り残されたかたちとなつて突っ立っていた。

どうしよう……。佐和子は、不安に襲われた。

互いに知らぬ顔をしていたとはいえ、満枝がすぐそばにいてくれればこそ、佐和子は生まれて初めての冒険に耐えることができた。

だが、その満枝は帰ってしまった。もう夕方である。ビルヂングの向こうに拡がる西の空が茜色に染まりつつある。どうすればよいのだろう……。

このまま帰るしかあるまい。だが、足が動かなかった。昨日の満枝の手紙に誘われるまま、着慣れぬモダンガールの洋装に身を包み、しなれぬ化粧をして、独りで一時間以上もパーラーで過ごしてしまった。結局、見合い相手と睦まじくお喋りする満枝の姿を見せつけられただけだったのだ。自分がひどく惨めに思えた。

ふと、タクシーが去った方を見つめる昭三が眼に入った。

肩をそびやかし、眼には苛立ちの色が浮かんでいた。一時間、ひたすら満枝のお喋りにやりこめられ、手を握ることすら許されぬまま、雑踏に取り残されたのだ。機嫌がよいわけがない。

だが、二人がかわした会話の内容までは知らぬ佐和子は、昭三が浮かべる表情に、ひどく傲慢なものを読みとった。あたかも、去っていった満枝を軽蔑しているかのように映った。

満枝の言葉が蘇った。

……からだを刺し貫かれるだけなら、まだ我慢もするわ。心まで刺し貫かれるのは、まっぴらよ。

昭三は、少し唇を曲げ、佐和子のほうに向かって歩き出した。どきりと心臓が鳴ったが、昭三が佐和子を見知っているはずがない。

傍らを通り抜けた昭三は、色白で端正だが、ひどく薄っぺらい顔だちだった。

こんな男に、満枝さんを指し貫かせてたまるもんですか……。

憤りのようなものが、佐和子の胸に沸き上がった。

佐和子は、昭三の後を追って歩き出した。

昭三は、まんざらH市に不案内というわけではなさそうだった。目抜き通りから横町に入り、それから左の道へ曲がり、突き当たりを右へと進み、いささかの迷いもなく歩いていく。

引き離されないようにと佐和子は必死だった。慣れぬハイヒールに足が痛む。日が落ちるにつれ、街の灯りはけばけばしさを増した。気が付くと昭三は、怪しげな風体の男たちや、ひどく化粧の濃い女たちが行き交う通りに入っていた。

さらに昭三は、薄暗い横町へと入った。薄暗く狭い道には人けはないが、突き当たりに、「高麗軒」という看板を掲げた小さな料理屋ふうの店があった。玄関の前に、異国の服を着た三十半ばほどの女が、扇子で胸元を扇いでいる。

「あれ、昭さんか。ひさしぶり」

言葉におかしな訛りがあった。朝鮮人だろうか。物陰にひそみ、そつと様子を伺いながら、佐和子は思った。

「よう」

昭三は手慣れたふうに右手をあげた。

「リカはいるかい？」

「あの子、やめたよ」

女は答え、昭三の腕を取った。

「そのかわり、あたらしい子、はいった。としは十二。ためして、みるか？」

「十二か、少し老けてるな」

軽い口調の昭三の声に、佐和子は息を呑んだ。

十二歳で老けている……。

路地の奥の店が、どういう商売をしているか、佐和子にも察せられた。昭三は、女を買いに来たのだ。幼い、朝鮮の少女を……。

「それよりわかい子、いない。でも、その子、とても小さい。やせてる。九つか十とよにしか見ええない。昭さんの好み」

「写真はあるかい」

「なかで見せる。こっち、は行って」

女の導くまま、昭三は店へと消えた。

佐和子は、ひとり物陰にしゃがみこんだまま、両手を拳につくつて握りしめた。

なんて男……。

満枝さんを愛しているなんて言っておいて、別れたらすぐ、こんなところに来るなんて。

しかも、この店に入ったのは一度や二度じゃなさそうだった。色白で薄っぺらい面立ちの昭三が、十二歳の幼いからだを弄もよほぶさまが脳裏に浮かび、軽い嘔吐おとを覚えた。

男女の夜の営みを、知らぬ佐和子ではない。

あの夜……。

そう、十年前のことだ。

深夜に目覚め、眠い眼をこすりながら、とぼとぼとこ不浄けがれへ向かう途中、佐和子は見たのだった。

父親が、見知らぬ女を抱いている姿を。

その頃、佐和子の母親は、長患いで入院していた。貿易会社に勤める父親は、満州や朝鮮へと出かけることが多く、一人娘の佐和子は、女中と過ごすことが多かった。

ある日、家の前に車が停まった。父親が帰ってきたのだ。佐和子は、部屋を飛び出して玄関に駆けた。久しぶりに帰ってきた父親を迎えようと扉を開けた時、すぐ外で、こんな会話がかわされていた。

「いいの？ お嬢さんがいるんでしょ？」

「なに、まだ八つだ。わかりやしないさ」

扉から顔を出した娘に、父親は慌てて笑顔を作り、ただいま、元気だったかい？ と優しくな声で右手をあげた。父親の隣に、派手な着物にシヨオルをかけた断髪の若い女がいた。

その夜。

夜中に起きた佐和子は、父親の寝室から、男女の喘ぎが漏れてくるのを聞いた。寝室のドアが少し開いていた。その隙間からそっと覗いてみた。

蛙のように両足を開いた女の上に、父親がのしかかっていた。苦しげにうめく女の胸や肩を、しゃぶりつくように舐めながら……。

その後、佐和子の母親は快復し、父親は出世して内勤となり、家族三人で過ごすことが増えた。佐和子は、あの日のことを誰にも漏らしていない。家では、素直な娘として振る舞い、客が来る

度に、父親はそんな娘を自慢した。

だが、たまに酔っ払って帰ってきた父親が、佐和子の体に触れようとする度に、抑えがたい嫌悪感が全身を駆けめぐる。母を裏切った父親の行為を知りながら、何も知らないかのように取りつくろうわが身が呪わしくなる。

昭三が店に消えてから、三十分ほどが過ぎた。いま、昭三は、幼い朝鮮人の少女を組み敷き、蛙のように両足を開かせ、あの忌まわしい行為に耽っているに違いない。その舌が、少女の肌を這い回るさまを想像し、またも嘔吐がこみあげてきた。

許せない……。

嘔吐を押さえ込むと、怒りで全身が熱くなった。

満枝さんに言おう……。こんな男と結婚してはならない。朝鮮人酌婦がいる娼館に入り浸り、幼い少女を抱くような破廉恥漢に、身を捧げてはいけない。

そう心に決めて立ち上がり、踵を返して歩き出した時、不意に横町に入ってきた男とぶつかった。佐和子は、喉の奥で小さく悲鳴をあげ、棒立ちになった。

着流し姿の、頬に鋭い切り傷のある男だった。そうとう酔っているらしく、右手を伸ばして、佐和子によりかかっていた。

「こら、気をつけねえか。いきなり出てきたら、危ねえだろ」

男の右手が、佐和子の肩を掴んだ。

次の瞬間、佐和子の右の膝に、やわらかな肉の塊が触れた。一瞬、平たくひしゃげ、また膨らんだ。

男の顔がこわばった。

口を半ば開け、眼を見開いた。左右の手で、股間を抑え、腰を引き、よろよろと後ずさった。後ずさった先は、家と家との間の狭い隙間だった。男は、その隙間に倒れ込み、動かなくなった。

佐和子は呆然と立ちつくした。

肩を掴まれ、反射的に男の股間を蹴り上げていたことに気づいたのは、しばらく立ってからだった。

それから、どのくらい経ったのだろう。我に返った時、男は壁と壁との間の隙間に仰向けに倒れていた。

苦しげに顔を歪め、白眼を剥き、両手は股間にあてがわれ、全身が細かく痙攣している。

あの時と同じだ……。遠足の日、山の中の泉のほとりに、不意に現れた白痴の男。満枝に股間を蹴り上げられ、そのまま倒れて動かなくなった。

同じ事を、やってしまった……。

佐和子の両膝から力が抜けた。そのまま地面にしゃがみこんだ。頭の中は真っ白だった。何も考えが浮かばない。

「おい」

背後の声に、佐和子は、床に寝かせてあった操り人形の糸が引かれたように、立ち上がった。

「何してるんだ？」

振り向いて、顔から血の気が引いた。

昭三だった。

「おい、君。大丈夫かね。顔色が悪いぞ」

総身が強張って動かない佐和子に、昭三は訝しげに歩み寄ってきた。息が吹きかかるほど接近し、笑みをつくった。身の毛がよだつような笑みだった。

「病気なのかね？ ぼくは、近くのホテルに泊まっているんだ。なんなら、ぼくの部屋で休んでいくがいい」

そのひとことで、体の緊張がほぐれ、かわって怒りが呼び戻された。

満枝の声が、脳裡に木霊した。

わたくしがもし、結婚せずにすむとしたら……。

川奈さんご自身の事情として、結婚できないということになれば……。

たとえば……。

佐和子は、視線を落とした。昭三の、白い麻のズボンのかすかな膨らみが眼に入った。今まで、幼い朝鮮人少女のからだを刺し貫いていたその膨らみで、満枝のからだをも刺し貫こうとしている……。

満枝は言った。もし、昭三が「子どもを作れないおからだになった」としたら、結婚は回避できる、と。

佐和子は、つかつかと昭三に歩み寄った。じっと視線を股間に据え、両手を伸ばした。左右の手が、やわらかな肉塊を、ひとつずつ捉えた。その手に力をこめた。

佐和子の額のあたりで、昭三が息を呑む気配がした。全身が激しく強張り、震え始めた。「あ……あ……」

押し潰された喉から絞り出したような呻きが、耳に入ってきた。佐和子は、ひらすら両手を握りしめた。

押し潰す……。

破裂させ、二度と使えなくなるまで、壊してやる。

一生、子どもをつくれぬ不具者にしてやる……。

不意に、激しい衝撃が佐和子の頭部で炸裂した。目の前が真っ暗になり、意識が遠のきそうになった。

昭三が、佐和子の顔を殴りつけたのだ。

離してはいけない……。

鼻の奥で血の匂いがした。佐和子は、必死で握りしめた睾丸を離すまいとした。

二度目の拳が、佐和子の顔を襲った。

掌のなかで、何かが弾けた。

どこかで、満枝の声がした。

……罪ぶかい女だわ、わたくし。

そのまま、佐和子は気を失った。

佐和子さん……。

ねえ、佐和子さん……。

懐かしい声だった。

六年前。初めて制服に身を包み、I高等女学校の校門をくぐった日。

そのときも、満枝は同じクラスにいた。当時から背が高く、その美しさは抜きんでいた。

仲良くなったきっかけは、覚えていない。だが、「佐和子さん」と呼びかけられる度に、それだけで佐和子は嬉しくなる。

その懐かしい声と呼んでいる。返事をしなくちゃ。

でも、なぜか声が出ない。声を出そうとすると、喉の奥からいがらつばい液体が溢れてくる。

熱い……。

顔の内部で火が燃え、吹き上げられた炎が頬を突き破りそうだ。

佐和子さん！

「満枝さん！」

そう叫んで、佐和子は眼を覚ました。

そこは、気を失った時と同じ場所だった。

佐和子の視界に、ぼんやりと星空が広がった。誰かが、佐和子を抱いている。暖かな体温が伝わってくる。

「かわいそうに、ひどく殴られたのね」
満枝だった。

かがみこんで、倒れた佐和子の上半身を抱き起こしていた。
「満枝さん……なぜ、ここに？」

「喋らないで」

熱くなっていた頬が、ひんやりとした。昭三に殴られ、腫れ上がった頬に、満枝は、水をふくんだハンカチを押し当ててくれたのだ。

脳裏にかかっていた霧もやが、次第に晴れていった。

「あの……」

記憶が戻ってくるにつれ、佐和子の全身が細かく震えはじめた。

「なあに？」

優しい満枝の声に、涙が溢れてきた。

「昭三さんは……」

「ああ、昭三さんね……」

満枝は、ため息をつき、ややあつて口を開いた。

「大丈夫よ、二人とも、人目ひとめのつかないところに、隠しておいたわ」

隠した……？

二人とも……？

そうだった。

佐和子は、酔っ払いの股間を蹴り上げて気絶させ、続いて、娼館から出てきた昭三の睾丸を掴んで、破裂させたのだ。

見回すと、確かに二人の体は、どこにも見当たらない。

満枝がどこかに運び去ったということなのか。いくら大柄な満枝とはいえ、大の男を二人も、いったいどこへ？

そもそも、円タクで家に帰ったはずの満枝が、なぜここにいるのだろう。満枝は続けた。

「心配しないでいいわ。誰にも見つからないもの。大丈夫よ」

「昭三さんは……」

佐和子は、齒の根が合わぬほど、唇を震わせながら、やつとの思いで問いを搾しぼり出した。

「どうなったの？」

満枝は答えなかった。その唇の端がかすかに歪んだのを、佐和子は見逃さなかった。満枝は顔をそらし、ややあつて口を開いた。

「歩ける？」

「……え？」

「ここにはいけないわ……。ひとまず、どこかに落ち着きましょう」

満枝に抱えられるようにして、佐和子は立ち上がった。

「さあ、歩いて……誰かに見られたら、まずいことになるわ」

「まずいこと？」

「そう……警察沙汰になつては、まずいことになるでしょう」

満枝は男装していた。黒いズボンに黒いスーツにネクタイ。手にはステッキを持ち、髪はたく

しあげて帽子で隠していた。背が高いだけに、じゅうぶん男性に見える。

モダンガールの格好をした小柄な佐和子とは、夜の盛り場をうろつくアベックに見えるだろう。なぜ、満枝がここに現れたのか。なぜ、男装しているのか。

得心のいかぬことは多かったが、問いただす気にはなれなかった。

とりあえず、わたくしの家にいきましょう。

大通りに出て円タクを拾い、郊外の満枝の家に向かった。

車のシートにもたれながら、涙が溢れてくるのを止められなかった。悲しいわけではない。安堵の涙でもない。恐ろしいのとも違う。

あえて言えば……絶望だった。なぜかは分からない。だが、佐和子は、確かに、何かを失った。車窓の外を流れる街灯に、眼がくらんだ。

もう、戻ることはできないんだ……。

佐和子は、昭三の鞆丸を破壊した左右の手のひらを見つめ、つぶやいた。

「罪を……犯してしまった……」

「罪じゃないわ」

並んで後部座席に座った満枝は、穏やかな面差しで右手を伸ばし、佐和子の手を取った。

「昭三さんが、あの店に出入りなさっていることは、知っていたわ」

慰めるように言う満枝の口調に、佐和子は車窓から視線を外して満枝を見た。

「まだ若い娘さんたちを弄ぶのがお好きだということもね」

淋しげに笑みを浮かべ、満枝は続けた。

「だからわたくし、雪花堂でいったんお別れしてから、家に帰って着替えて、あの店に行ったの。わたくしとのランデヴーのあとでも、あの店に行くような方だったら、なんとしても、この縁談を壊そうと思って。そうしたら……」

満枝は笑みをおさめ、強く佐和子の手を握りしめた。

「あなたがいなかったら、おそらく、わたくしが同じことをしていたと思うわ」

そのひとことに、硬い面持ちを保とうとしていた佐和子は、殻を突き破るようなの感情を溢れさせた。満枝の膝に顔を埋め、激しく泣いた。

嗚咽する佐和子の肩を撫でながら、満枝は言った。

「罪を犯したのは、昭三さんのほうよ。経営が苦しいお父様の会社を建て直すため、わたくしの資産をあてにして縁談を持ちかけてきた。それを隠して、わたくしを愛しているから結婚したいのだと嘘をおっしゃった。そのくせ、貧しい家から見知らぬ国に売られてきた、年端もいかない、かわいそうな朝鮮の娘さんを弄ぼうとする。わたくしたちは、昭三さんが受けてしかるべき罰をくだしただけ」

泣き伏していた佐和子が、肩をびくりと動かした。涙で化粧がはげ落ちた顔をあげ、凝然と満枝を見つめた。

「わたくしたち？」

「ええ」

満枝は、いとおしげに佐和子を見つめ返した。

「あなたと、わたくしとで」

伊集院家の、薔薇のアーチのある門の前で、車は停まった。

玄関を開けると、篠原ヨシが待っていた。男装の満枝にも、顔を腫らしたモダンガール姿の佐和子にも、表情ひとつ変えず、「お薬を持ってきました」と踵を返した。

満枝は佐和子を抱きかかえるようにして階段をあがり、自室に入った。佐和子をベッドに座らせ、水差しの水をグラスに注いで渡した。

子どものように、一気にグラスの水を飲み干す佐和子を見つめ、満枝は微笑みを絶やさなかった。ドアがノックされ、篠原ヨシが、ハトロン紙に包んだ飲み薬と、軟膏の入った薬壺を持ってきた。

「わたくしがやるから、あなたはもう休んで」

満枝の言葉に、ヨシは一礼して去った。満枝は、薬壺の蓋をあけ、人さし指で軟膏をすくい取り、腫れ上がった佐和子の頬にそっと塗った。

「痛かったら、そう言ってね」

内出血で熱を帯びた頬に、ひんやりと軟膏がしみいった。佐和子はおとなしく、両手を膝でそろえて、満枝の治療を受けた。

さらにグラスに注がれた水で痛み止めの飲み薬を嚥下すと、佐和子は「ありがとう」と小声で言い、頭を下げた。

「ねえ」

満枝は勢いよく立ち上がり、相好を崩して言った。

「お腹すかない？」

物音に起き出してきた篠原ヨシを、いいの、わたくしたちがやるから、と追い返し、満枝と佐和子は、おそろいの割烹着を羽織って、台所に立った。

「なにを食べましょうか？」

「お汁粉！」

「賛成！」

佐和子が七輪に炭を入れ、火を熾した。満枝は鍋を取り出し、水を張って七輪にかけた。小豆と砂糖をいれ、煮立つのを待ちながら、上新粉に水をふくませ、丸める。煮立った鍋に放り込み、ぐつぐつと、甘い香りとともに音を立てる鍋をあぶる炎を見つめ、満枝と佐和子は肩を寄せ合って座り、無言で眼差しをかわしあい、笑みを浮かべ合った。

いただきます。

テーブルに向かい合い、できあがったお汁粉を啜った。

「おいしかった」

吐息とともに言ったのは、佐和子だった。

「雪花堂でライスカレーを食べてから、晚ご飯どころか、水も飲んでなかったんだもの」

「わたくしもよ」

満枝は、お腹をさすって言った。

「雪花堂ではかき氷を頼んだだけ。佐和子さんより、お腹がすいてたの」

「お昼は何を食べたの？」

「丸福のざる蕎麦」

「あそここのざる蕎麦って、薄くしか盛らないんでしょう？」

「ええ、一箸で掬すくえてしまうの。そのくせ、十五銭もするのよ。老舗らしんせを鼻にかけて気取ってるんだわ。とても足りなくて三膳注文したの。そうしたら、昭三さん、よくお食べになりますね、あなたが嫁いできたなら、近所の米屋も魚屋も大喜びだろう、だって。つまらない人」

満枝はけらけらと笑い、佐和子は口をつぐんでうなだれた。

昭三の名を口にされ、横町でのいまわしい一件が、再び脳裏に浮かび上がってきたのだ。

満枝も笑みをおさめ、ごめんなさい、と眩くらき、背筋を伸ばして言った。

「疲れたでしょう。休みましょう」

満枝の部屋に戻り、ヨシが用意してくれた夜着に着替え、並んでベッドに入った。

灯りを消し、闇に覆われたなか、佐和子はじっと天井を見つめていた。

「眠れないの？」

満枝の問いに、佐和子は小さくうなずき、両手で顔を覆った。鼻孔から、嗚咽おんげんが漏れ始めた。

「泣かないで……わたくしが、いやなことを思い出させてしまったのね」

佐和子は首を振り、満枝に抱きつき、声をあげて泣いた。

「わたくし……怖い」

「怖くなんかないわ」

満枝は、佐和子の肩を撫でながら言った。

「何があっても、あなたを守ってあげる」

「そうじゃないの……怖いのは」

佐和子は、しゃくりあげながら言った。

「あんなひどいことをして……怖い……自分が怖い……」

「あなたは怖くなんかないわ」

「だって……」

「ねえ」

満枝は体の向きを変え、佐和子を見つめた。窓から入ってくる月明かりが、満枝の白い顔を青く照らし出した。

「佐和子さん、東京に行くっておっしゃってたわね」

「ええ……」

佐和子は、瞬まばたきもせずまっすぐ見つめてくる満枝の眼差しから逃れるように、そのふくよかな胸に顔を埋めて呟いた。

「でも、もうだめ」

「なぜ？」

「だって……見つからないわけがないわ。わたくしが東京に行ったら、警察だって、罪がばれるのが怖くて逃げたんだと疑うかもしれない……そうなったら、従兄にもご迷惑がかかるわ……」

「東京にね」

満枝は、乳房に佐和子の顔を感じながら、彼女の髪を撫でつつ言った。
「あなたを守ってくれる人たちがいるの」

「え……？」

佐和子は顔をあげた。

「いったい……どなたが？」

「わたくしの知り合いとだけ言っておくわ」

満枝は、佐和子の唇に、己の唇を重ねた。佐和子は、おとなしく接吻を受け入れた。満枝は、指をやわらかく佐和子の耳元から肩まで下ろした。佐和子のからだは、軽く痙攣した。

「あなたは、明日、ここを出なさい。港から船に乗って、青森に行くの。そこまで見送ってさしあげるわ。そのまま、汽車に乗って東京まで行って……」

満枝の指が、佐和子の夜着の胸元から這い入り、乳房のあたりをまさぐった。

「あ……」

佐和子は吐息をもらし、眼を閉じた。満枝の指は巧みに動き、佐和子の夜着を押し広げ、乳房から陰部へとゆっくりと這った。

「しばらく、従兄の家にいなさい。そのうち、あなたを匿かくまってくれる人たちと会えるよう、手配するわ」

「満枝さんは……？」

敏感な部分をまさぐられ、喘あえぎながら佐和子は問うた。

「わたくしは、しばらくここにいろわ。やらなければならぬことが残ってるの」

佐和子は小さく悲鳴をあげた。満枝の指が、固く閉ざされた佐和子の唇を、押し開けたのだ。

「いずれ、わたくしも東京に行くことになるでしょう。それまで、待っていてくださる？」

佐和子は無言で満枝にしがみつき、無言で頷いた。

安西小百合は、夏休みが始まると、連絡船に乗り、津軽海峡を越えた。弘前に住む叔母の家で過ごすためである。

父親の妹に当たる叔母アヤノは、明るく闊達かつたな性格であった。夫婦には子どもがなく、そのせいでろうか、姪の小百合をことのほかかわいがってくれた。長い休みには、叔母の家に遊びに行くのが、ここ数年の慣わしだったが、それだけではない。

とにかく北海道を離れたかったのだ。礼拝堂での満枝と佐和子とのやりとり、すさまじい形相で飛び掛ってきた外山澄江、その澄江の休学……。何もかも忘れたかった。

青森港の波止場に降り立つと、叔母の夫である磯田いそだが出迎えてくれた。

「ちようどお昼だ。鉄道に乗る前に、なにか食べておくかね？」

叔母の夫で、人あたりのよい磯田幸吉いそだゆきちに誘われ、波止場のそばの食堂に入った。青森から弘前までは、さらに奥羽本線で一時間以上かかる。

「叔母さまはお元気？」

連絡線から降りたばかりの客でにぎわう食堂の席につき、カレーライスを注文してから、小百合は訊ねた。

「あいかわらずだ。最近は生徒も増えてきてね、大勢養子をとったようなのだと張り切ってお

るよ」

叔母は、華の師匠をしている。高等小学校教師を務める磯田ともども、子どもが大好きなのだ。世間では、わが子を邪険にし、死なせてしまふ親もいるという。貧しい農村では、間引きも当たり前のように行われている。それなのに、この夫婦に子どもができないなんて。小百合はふと不憫に思う。

「あなたのところはどうかだね？」

「父も母も元氣よ」

「そういえば、秋からは六年生なんだね。早いもんだ。つい、こないだまで、よちよち歩きかと思っていたら、もうお年頃だね」

年頃、という言葉に、小百合は満枝の言葉を思い出した。

……男は、その醜いものをもって、わたくしたち女のからだを刺し貫く。

……わたくしはいや。からだを刺し貫かれるだけなら、まだ我慢もするわ。心まで刺し貫かれるのは、まっぴらよ。

胸から喉にかけていやな匂いのようなものが拡がり、小百合は俯いた。磯田は慌てて言った。

「いや、いまの言葉は、ちょっとデリカシイにかけていたね。失敬、失敬」

拜むようにして謝る磯田に、小百合は微笑んだ。磯田は若い頃、貧民救済運動に加わったこともあるモダニストで、近頃さかんな婦人参政権運動にも理解を示していた。叔母のことを「さん」づけで呼ぶフェミニニストでもある。男っぽいところのある叔母を、優しく受け止める度量の広い人間味があった。

磯田さんや叔母さんのように、ほんとうに睦まじく、お互いを認め合っている夫婦もあるんだわ……。小百合はそう思うことで、満枝の言葉を脳裏から追い出そうとした。

「しかし、恐ろしいことがあるもんだなあ」

隣の席に座っていた旅行客が、連れの男に喋っているのが聞こえてきた。小百合と同様、北海道からわたって来たのだろう。北海道で発行されている新聞を広げている。

「なんだって」

「H市の、でかい会社の跡取り息子が、なにを潰されて殺されたんだってよ」

小百合の顔から血の気が引いた。男は続けた。

「なんでも、H市じゃこれで六人目だそうだ。とんだ猟奇事件で、警察も血眼で犯人を捜してるらしいんだが、お手上げなんだってよ」

それきり、鼓膜が蓋をされたように、小百合の耳には何も入ってこなかった。

どうしたね？

訝しげに問う磯田の声に、我に帰った。心配げに覗き込む磯田に、笑みをつくって返し、小百合は言った。

「磯田のおじさま」

「なんだね？」

「わたくし、新聞を読みたいわ。どこかで売ってないかしら」

「新聞をかい？」

「ええ、近頃は、社会のことも勉強しなくてはいけないと、先生に言われているの」

「そうかい。表に売り子がいるだろう。買っておいで」
立ち上がり、すばやく隣の席の男が読んでいる新聞に眼を走らせ、店を出た。港から駅にかけて、さまざまな店や屋台が連なっている。その通りに、新聞を売る少年たちが並んで声を張り上げていた。

さいわい、男が読んでいたのと同じ新聞が売っていた。一部買い求め、食堂に戻ると、ちょうどカレーライスが運ばれたところだった。小百合は、新聞を畳んでかばんに入れ、いただきまます、と両手を合わせた。

「読まないのかい？」
と問う磯田に、鉄道のなかで読むわ、と答え、スプーンでカレーを掬^{すく}って口に運んだ。

かばんから新聞を取り出し、広げて読み始めたのは、弘前に着き、叔母の家にあがり、にぎやかな夕食を終え、あてがわれた寝室で独りになってからだだった。

——恐るべき猟奇殺人

——川奈産業の御曹司、兇漢の毒牙に果てる

——無残にしておぞましきその手口。犠牲者は一人ならず……

——センセエシヨナルな見出しとともに、川奈昭三の写真が添えられていた。

……S市で有数の財閥である川奈昭一郎氏の子息である川名昭三氏（二四）が、昨日未明、H市内の排水溝で死体となって発見された。

……死体には、これといった外傷もなく、ただ、睾丸が二つとも破裂せしめられ、おびただし

い出血があった。おそらく川奈氏は、何者かに襲われ、睾丸を圧迫され、非常なる苦しみの果てに悶死したものと思われる。

……同氏は、東京の商科大学に通いたる学生であるが、夏休みにS市内に帰郷し、その日はH市に住む知人を訪ねていたという。一方で、H市内の某所にある醜業窟を川奈氏が訪れていたという噂もあり、警察では、同氏その日の行動を血眼になって捜査しておる。

……発見現場近くの住人によると、睾丸を破裂せしめられるという無残な手口で殺された者は川奈氏一人ではないという。すでに、六人もの男性が、だいじな睾丸を潰され、絶息したという。「おかげで、夜の人出が減って、商売あがったりだ」と、ある飲食店主は嘆く。

満枝ではない……。

小百合はとっさに思った。

「わたくしがもし、結婚せずにすむとしたら……」

「川奈さんご自身の事情として、結婚できないということになれば」

「たとえ……子どもを作れないおからだになったとか……」

礼拝堂で佐和子に言った満枝の言葉を、小百合は思い出していた。満枝は、キリスト像を見上げながら、こうも言った。

「罪ぶかい女だわ、わたくし」

満枝の言う罪とは、多くの男性の睾丸を破裂させて殺したことはない。おそらくは……。
そう。

佐和子をして、同じ罪を犯せしめたのだ。

おとなしく、目立たない佐和子を、殺人者の仲間として加えた。

でも……。

いったいなんのために……。

川奈昭三を殺害したことは、許されることではないが、理解できなくもない。望まぬ結婚を避けるという目的があったから。では、遠足の時に山の中で襲ってきたあの男は？ 無事逃げおそれたのに、わざわざ戻ってきて去勢する意味はあったのだろうか。他の人たちは？

佐和子を唆^{そそのか}して昭三を去勢させ、死に至らしめたのではないかという直感が正しいとしたら、それはなんのため？

「考えるのはよそう……」

小百合は口に出して呟いた。呟きつつ、満枝と佐和子の礼拝堂での会話を聞いてしまったという事実から、決して逃げられることはないだろうと、心の片隅で感じていた。(第一部・了)